The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	コメント4　近代と東アジア
Author(s)	小島, 泰雄
Citation	近代東アジア土地調査事業研究ニューズレター. 2009, 4, p. 118-120
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/26999
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

コメント４

近代と東アジア

小島泰雄

はじめに

今回のコメントは本プロジェクトの時空をめぐるものとなる。すなわち近代と東アジアの２点に焦点をあわせてゆくこととする。

１．隣の庭が道路になっていた

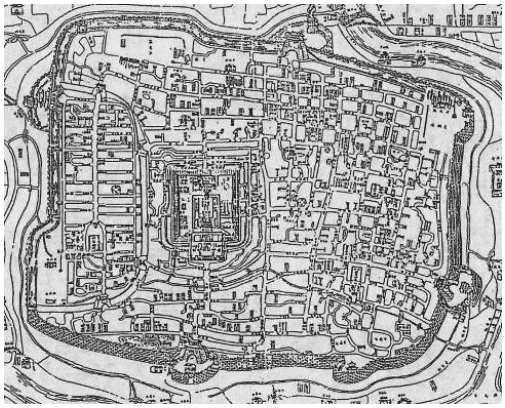
10 年ほど前、ひさしぶりに実家に帰ったとき、隣家の庭の一部が道路になっていた。事情を父に尋ねると、土地登記と実際の宅地区画が異なっており、市と隣家が相談したうえで、登記にあわせて道路の拡幅が行われたとのことだった。

3 平米にも満たないささやかな区画変更ではあるが、日本の地籍図が持つ権威の強さを語るには十分な事例であろう。一方、中国では地籍の整備は、政府によって繰り返し標榜されるが、土地が国有である都市においては、地籍の整理が進められているものの、集団所有の農村においては、まだその実施は例外的である。

東アジアの隣国である中国と日本、その間には多くの類似がある一方で、いくつかの相違がある。たとえば本プロジェクトが対象とする土地調査事業について言えば、ルースな中国とタイトな日本、という対照的な性格を指摘することができるように思われる。

田口報告が他項権利に注目し、大坪報告が旗人を取り上げ、片山報告が佃権をキーワードとしたように、プロジェクトは十分にこの日中間の差異を意識して進められているのであるが、ここであえて、東アジアにおけるこの違いが何に由来するのかについての見通しについて、個別の検討と考察の作業の文脈において語ることを、課題として提示したい。

２．２枚の成都図



光緒二十年図

出典：「四川省城街道図」呉紹伯、
光緒二十年（1894）、
《成都市志 勘測志》（1997）所載。

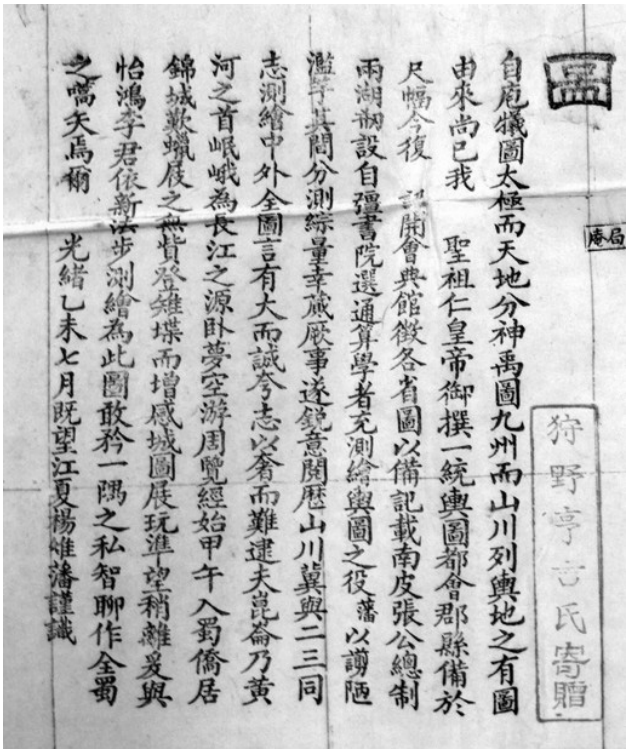
光緒二十一年図

出典：「四川省城街道図」楊維藩、
光緒二十一年（1895）、
東北大学付属図書館所蔵。

19 世紀の終わりに描かれた２枚の成都図には、明確な転回が確認される。それをひと言でいえば、「正確さ」の獲得であろう。成都は正南北から東に 20 度ほど傾いた都市軸をもっているが、光緒二十年図には十分に表現されず、光緒二十一年図には明快に表現されている。

この違いについて、光緒二十一年図を描いた楊維藩が、その題記に次のように述べる。

「城壁に登って、都市図をひろげて見ると、方角が違っていた。そこで李怡鴻君と一緒に、新しい方法によって歩測し、この図をえがいた。」



圖

自庖犧圖太極而天地分神禹圖九州而山川列輿地之有圖
由來尚已我　聖祖仁皇帝御撰一統輿圖都會郡縣備於
尺幅今復　設開會典館徵各省圖以備記載南皮張公總制
兩湖剏設自彊書院選通算學者充測繪輿圖之役藩以謭陋
濫竽其間分測綜量幸蕆厥事遂鋭意閱歷山川冀與二三同
志測繪中外全圖言有大而誠夸志以奢而難逮夫崑崙乃黄
河之首岷峨為長江之源卧夢空游周覽經始甲午入蜀僑居
錦城歎蠟屐之無貲登雉堞而增感城圖展玩準望稍離爰與
怡鴻李君依新法步測繪為此圖敢矜一隅之私智聊作全蜀
之嚆矢焉爾　光緒乙未七月既望江夏楊維藩謹識

狩野亨吉氏寄贈

この正確さを獲得した成都図について「全蜀の嚆矢」という矜持をもっている楊維藩は、武漢から成都へやってきた人物である。

清末に行われた全国的測量作業において、武漢は一つの中心を形成していた。張之洞が推進した洋務運動の影響下で、西洋の測量を取り入れた測絵作業が進められた。楊維藩がその測量作業に従事していたことは、この題記にも記されている。近代に触れた楊維藩にとって、方角を違えた地図はすでに乗り越えるべき対象となっていたのである。

おわりに

プロセスとしての近代化は、この 2 枚の成都図の間にあるような、近代への一歩を踏み出す瞬間の集合と捉えることも可能だと思われる。近代を西洋の衝撃と関連づけて考える東アジアにおいて、こうした想定は一定の説明力を有するだろう。そうした視点から個々の作業における発見を整理することを、もう一つの課題として提示したい。